

## 勤労感謝の日 労働について考える

今日 11 月 23 日は勤労感謝の日です。

古くは天皇陛下が自ら収穫された新穀を神々に奉納される新嘗祭が起源とされるが、戦後の祝祭日の見直しにより、アメリカではこの頃に感謝祭 (Thanksgiving) と云う祝日があり (この感謝祭からクリスマスまでの約 1 ヶ月間がアメリカで最も美しい時期だと思いません)、天皇陛下も自ら田に立って稲を収穫されたのだから勤労だろうと、‘勤労’ と ‘感謝’ が一つになって制定されたのでは無いかと思います。

国民の祝日に関する法律によれば、「勤労をたつとび、生産を祝い、国民がたがいに感謝しあう」ことを趣旨としている一と、されています。

さて、年金生活で一日中プラプラしている筆者が言うのも何ですが、今回は、勤労ー労働について考えてみたいと思います。

日本では「一人前の男が昼間からプラプラしていたらお天道様に申し訳ない」と、誰に強制される訳でも無いのに自発的に勤勉に働き、額に汗して働くのが大好きな国民です。

しかし、日本以外の国に眼を向けると少し違ってきます。

現在の日本人の三大義務は、教育・勤労・納税ですが、例えば古代ギリシャでは国民 (市民) の義務は、議論すること、投票を通して政治に参加すること、兵士として戦争に出て国家のために戦うことです。

労働とは義務では無く、奴隷がするもので、市民がするものでは無かったのです。

この考えは古代ローマに受け継がれ、別の所で書いたように現在の西欧人にも受け継がれています。

汗をかいて働くことは‘奴隷の労働’として忌避されます。

日本人は額に汗をかいて働かないと働いた気にならないモノですが、外国人には汗にまみれて働くことを喜ぶ人は異常な眼で見られます。

聖書では労働とは天から降された罰ー人間の原罪とされています。

エデンの園を与えられた人類の祖であるアダムとイブは何も働かなくても一生安楽に暮らせることを約束されていたのでした。それが悪魔の誘惑に負け禁断の果実を食べてしまったため、神の怒りに触れ、楽園から追放されてしまったのです。

この時、神はアダムに「これからお前は汗をかいて働かなければならない」と告げ、イブに「これからお前は苦しんで子を産まなければならぬ」と宣告します。

労働は天罰ですから誰でもあまり受けたくない。カトリック系のキリスト教徒の多いラテン系のヨーロッパ人を日本人の目から見るとあまり熱心には働いて無い様に見えます。

しかし、この考えは 16 世紀の主教改革で改められます。

カトリック教会により専横的に支配されていた体制に反発したプロテスタント系のキリスト教徒は、当時聖職者しか読む事が出来なかった聖書を一般人にも読める様に普及させ、修道院で行われていた聖職者による禁欲的労働を一般民衆にも広めたのです。

ここから更に、『労働とは天罰では無く、働くことにより隣人に安く良い物を提供することは、神の道に通じる』と云う天職（ベルーフ）と云う考えが生まれてきました。

ドイツの社会学者のマックス・ヴェーバーは、近代資本主義はカルバン派プロテスタントの中から発生したと述べております。

日本でも、働くとは‘<sup>はた</sup>他者を楽にさせる’事だと言われ、他利的な行為が回り回って帰って来て自分を楽にさせると考えます。

江戸時代には日本人の間でも禁欲的労働を通して社会に奉仕するという、プロテスタント系キリスト教徒に似通った生活態度が一般化しました。

この事が、明治期に西欧資本主義国と接触した時に、いち早く資本主義を定着させ、西欧諸国に伍する近代国家に発展させる土壌となったと考えます。

あまり変わらない時期に西欧諸国と接触したアジアの諸国は、圧倒的な西欧資本主義国の前に屈してしまいましたが、日本だけは西欧諸国と肩を並べる国に成長出来ました。

これも偏に日本人の労働観が在ったためと考えます。